

# 同志社大学のPBL

## プロジェクト学習とポートフォリオ(3)

同志社大学文学部教授 山田 和人

### PBLにおけるポートフォリオの学習効果

活動日誌をつけた場合とつけなかった場合を比較してみると、次の点において相違を見いだすことができる。

- 1 プロジェクトの方向性がぶれにくい。
  - 2 ミーティングの議論が堂々めぐりをしない。
  - 3 メンバーの仕事量の偏りを回避しようとする。
  - 4 授業や部活動、アルバイトとのバランスがとれた(学生版ワーク・ライフ・バランス)。
  - 5 チーム内における自分の役割が把握できるようにになった。
  - 6 持続力と忍耐力が向上した。
  - 7 チームへの帰属意識が強くなった。
  - 8 言語化を通して、プロジェクトの社会性を自覚するようになった。
  - 9 客観的に自己評価できるようになった。
- PBLの評価基準として、ポートフォリオプロセス評価は大きな指標の一つである。プロセスを重視する場合、定観測として随時アンケート調査を行い、その学習過程をデー

タ化して把握する測定法をとる場合と、今回紹介した学習者自身の自己評価を基準にした日常的な相互観察法をとる場合がある(前号、前々号参照)。その両者を併用することで、学習者自身が自分の学びの深化を現在進行形で実感できるような生きた評価を生み出していきたい。そして、現在進行形で遂行されるプロジェクトを学習者自身が常にモニタリングして、自己評価し、改善に結びつけていく前向きな姿勢を獲得できるようにすることをプロジェクト学習の一つの大きな目標として掲げたい。

### 学生成績会議による相互評価

最後に、プロジェクトの評価のために開催する学生成績会議について紹介したい。学習者はプロジェクト学習を通して、評価者としても成長していく。メンバーからの励ましや指摘によって、評価されることに喜びと充実感を抱くようになる。そこで、自分たちの活動をもっとも詳細に知るメンバー同士で、成績会議を開催することになっている。具

- クトを始めるとすれば、どのような点に留意しますか(四〇〇字)。
- 4 あなたは、このプロジェクトを通して、何を学ぶことができましたか(六〇〇字)。
  - 5 あなたにとって、このプロジェクトは、今後の人生にどのような影響をあたえたと考えますか(四〇〇字)。
  - 6 あなたは、本プロジェクトの成果を何点と評価しますか(一〇〇点満点)(二〇〇字)。評価のポイントもあわせて記入してください。

記述式の自己評価表であるが、全員が字数を超えた自己評価を的確に示すことができた。これは、すでに掲示板形式の学習新システム(CNS以前)にアップした上で、当日プリント配布された。

一人一人が自己評価表をもとに自分自身の活動を総括的に発表していく。それについて、チームのメンバーと率直な意見交換が行われる。そこには、談笑が絶えない穏やかな時間の流れがある。

プロジェクト学習では、担当者と学習者が対等の立場で自分たちの活動を振り返り、総合的に評価できるような場と機会を設けたい。

### 自己評価力の精度と客観性

結びとして、二〇〇六年度にプロジェクト科目「能楽入門プログラムの開発と研究」という科目を担当した時の学生の自己評価表を紹介したい。この科目は、学生が同志社小学校三年生の児童と一緒に能の体験学習を通し

て、日本の伝統芸能の魅力を楽しく、わかりやすく伝えることを目標に取り組んだ。学生も能楽についてはほとんど知らないところからスタートした。成果としては、能楽師四人と太鼓方の協力を得て、父母にも参加いただいて、春、秋二回のワークショップを実施することができた。担任の先生方とのミーティング、授業参観、担任の先生が使用する能楽教材DVDの作成、家庭学習プリントの作成、展示用の能装束や面の借用、演目解説のためのストーリーボード(紙芝居)、継続的な教育活動としてのプログラム開発、小大連携プロジェクトの推進を実現することができた。

評価としては、父母のアンケート(記述式)、担任の先生からの講評、児童からは体験学習の感想としての絵日記(後に返却)によって、きわめて高い評価を得られた。佛敎大学の初等教育の専門家の評価もいただくことができた。何よりも小学校での教育・学習活動へと学生が目覚めていくプロセスが、プロジェクト学習の醍醐味を教えてくれた。

以下にいくつかの事例を紹介する。提出されたテキストのままの引用である。

- ◎Yの場合。最初はそれほど深くプロジェクトにかかわっていたわけではないが、自分に自身ものポジションを定めることができるようになってきた。プロジェクトの活動総時間数は五三〇時間、と答えている。
- 3 あなたは、もう一度最初から、このプロジェクトを始めるとすれば、どのような点

体的には、学生は、自らのポートフォリオと自己評価表に基づいて自己アピールを行うとともに、メンバー間で相互評価を行う。お互いに同じプロジェクトに取り組んできたという意識と信頼感が強いので、ここでの評価はきわめて率直なものであり、客観的である。担当者の評価と一致するか、もしくはやや辛めの評価になる。この会議を通して、学生は評価される側ではなく、評価する側に立つことにもなる。それによって、自己評価の精度もさらに上がり、チームのなかでのポジションと役割を通して、チームワークの大切さにあらためて気づくことになる。

自己評価表の項目を紹介しておきたい。

- 1 あなたは、このプロジェクトを遂行するために、何時間の時間を要しましたか(二〇〇字)。算定基準をあらわせて示してください。
- 2 あなたは、プロジェクトのなかでどのような役割をはたすことができましたか(四〇〇字)。
- 3 あなたは、もう一度最初から、このプロジェ

に留意しますか。

現在はかなり改善されたが、最初の頃に全く自己管理出来ていなかったことが大きな後悔として残っているため、その点に留意できたら良かったと思う。自己管理意識の欠如は、体調を崩す・タスクを引き受けられなくて他のメンバーに迷惑をかけるなど、様々な悪循環の原因になる。何よりWSが終わったときの達成感が違う。そのことに早い段階から気づけていたら、後悔せずにすんだし、自分の行動がプロジェクトの進行を妨げることもなかったと思う。

前項に関連することだが、早い段階から積極的にタスクを引き受けていればよかったと思う。メンバー間のタスクの不平等の解消にも繋がったし、何よりもっと自分を成長させることが出来たと思う。自己管理をして余裕を持ってタスクをこなせば良かった。

このプロジェクトの意義・能・小学生・能楽師など、様々なことをもっと突き詰めて考えればよかったと思う。そうすれば、アイディア力(私に最も足りない力)の向上に繋がったし、プロジェクトをより深いものにするこ

◎Tの場合。本プロジェクトの涉外を担当した。常にリーダーを補佐し、サポーターシップを発揮してきた。活動総時間は七七〇時間、と答えている。現在、某新聞社に勤務している。現場で、プロジェクトリテラシーが大きい役に立っているという。

#### 4 あなたは、このプロジェクトを通して、何を学ぶことができましたか。

一年をおしていえることは、時間の使い方がうまくなったということである。春学期、時間の使い方がまずく、体調を崩すことがたびたびあったため、どのように活動していくかをよく考えた。その結果、自分の活動について明確な短期的目標を設定し、それを実現するにはどのような活動が必要か、どの時間を使って活動するのかを十分に考えることにした。そうすることで、少しの時間をうまく使って効率的に作業ができるようになった。また、PCスキルの習得についても、まず完成目標のイメージを考え、それに必要なスキルを習得していった。

今までのわたしなら、自分の持っているスキルや能力から、自分にできる範囲で目標設定をしていたが、目標に合わせたスキルアップを目指したことで、自分に制限をかけることがなくなった。苦手分野の克服の方法を学んだ。これには、同様に苦手な分野の克服を目指したメンバーの存在も大きかったと思う。励ましあいながら、お互いにアドバイスしながらがんばれたことが大きな励みになった。また、枠を取り払ったことで、積極的に活動ができるようになり、周囲を見渡す余裕も生まれた。自分の役割やタスクをこなすだけではなく、状況に応じてタスクを引き受けることができるようになった。このことから、チームの中で自分の役割を把握して、柔軟に対応することを学んだ。状況を判断して、

自分のすべきことを考えられるようになったと思う。

◎Sの場合。本プロジェクトのリーダーをとめた。プロジェクトの活動総時間数は一二〇〇時間、と答えている。これは大学四年間の学習時間に相当する。現在、同志社大学職員として勤務している。将来はプロジェクト科目を担当してくれることを密かに期待している。プロジェクト科目の受講生が先輩の話聞きに行っているようである。

#### 5 あなたにとって、このプロジェクトは、今後の人生にどのような影響をあたえたと考えますか。

この一年間のプロジェクト活動で、すでに人生が変わったと思う。まず、物事をいろんな方向から見つめ、好きな面・楽しめる面を見つけられるようになったことが大きい。自然と能を好きになれたこともその一つであり、今後は自分が楽しむために、能楽堂に足を運びたい。能だけでなく、伝統芸能全般に対する意識も変わり、確実に今後の人生が豊かになる気がする。リーダーという役割・チーム運営においても、つらいことをプラスに変えられるような部分を見つけたことができたので、さまざまなことに対する受け止め方が変わると思う。

また、秋から就活を並行して行うなかで、将来教育に携わりたいと思うようになった。もともと子供や「教える」ということが好きだったが、職業として教育に関わりたいと思

うようになったのは、このプロジェクトに影響されたからだと思う。この一年で触れた児童の可能性・先生方の教育に対する思い・メンバーも含む周りの成長が、心から好きだと思ふようになった。

一年間という限られた期間のプロジェクトであるが、受講生の自己評価表を改めて読み直してみると、そこにはPBLの持っている可能性を強く感じさせられた。自己申告させている学習時間は、そのまま学習者のプロジェクトとの関わりを反映しており、プロジェクト学習の評価に重なってくる。同時にコメント数の推移を数値化してみると、同様にプロジェクト学習に対する評価と一致してくる。こうした傾向をとらえることができるのも、学習者によって、主体的に刻まれたポートフォリオがあればこそと言える。自分自身の方向性を決める羅針盤としての自己検証の記録が、ポートフォリオプロセス評価の貴重な資料になっている。

この文章を閉じるにあたって、一言申し添えておきたい。たかが一年で何ができるのかと思われるかもしれないが、Sリーダーのようになら自分自身の進路が大きく変わっていくこともある。一二〇〇時間。濃密な一年は、軽はずみな四年間を越える、そういうことを教えられたように思う。

